

聖書:ルカの福音書9章51～62節

説教:神の国にふさわしい者

はじめに

今日の箇所は、前半がサマリア人のこと、後半がイエスに従おうとした人たちのこと、大きく二つに分けることができ、内容としてはまったく関係のない別々の話題に見えます。どうして関係がない話が並べられているのか、少し不思議です。そしてもっと戸惑うことがあります。イエスに従うためには、親が死んでも葬式を挙げることもあきらめなければならないのか。家族とお別れのあいさつさえしてはならないのか。もし本当にそうだとするのなら、いったいどれだけの人がイエスに従えるというのだろうか。

このことに関連して、昔見たテレビの報道番組を思い出します。もう三十年前のことです。ある新興宗教に入信した方が、団体の幹部からすぐに出家しなさいと言われ、その人は親が止めるのも聞かず、表情を硬くしながら家を出て行き、残された家族は悲嘆に暮れていた。そんな内容でした。もしかしてキリスト教もどこかのカルト宗教と同じで、実は危険な宗教だったのか。もちろんそんなはずはない。ではどういうことなのか。ともに考えて参ります。

1 サマリア人

1) 歴史的事情

51, 52節。「さて、天に上げられる日が近づいて来たころのことであった。イエスは御顔をエルサレムに向け、毅然として進んで行かれた。そして、ご自分の前に使いを送り出された。彼らは行ってサマリア人の村に入り、イエスのために備えをした。」ところが、サマリア人はイエスを受け入れようとしません。別にサマリア人が特別に不信仰だったからということではありません。歴史的な事情があります。時代は第一列王記12章の頃までさかのぼります。イスラエルの三代目の王であったソロモンが亡くなり、その息子のレハブアムが跡を継いだときのことです。新しい王さまになったのを機会に、人々は税金を軽くして欲しいと願い出たのですが、レハブアムは非常に厳しい態度でこれを断る。人々は新しい王さまには望みがないと見限り、自分たちだけで別の王(ヤロブアム)を立てて紀元前931年に北王国イスラエルとして独立してしまう。もともとあった国は南ユダ王国と呼んで、二つの国になってしまった。その北王国の

末裔がサマリア人ということになる。イエスの時代になり、北と南に分かれてから千年以上経つのですが、まだしこりが残っていてサマリアとユダの人々は仲が悪かった。イエスはユダの国の人とみられ、その上「御顔をエルサレムに毅然と向けていた」というのですから、サマリア人がイエスを受け入れようとしめないのは当然なのです。

2) イエスの視線

問題は、このことをどう考えるか。折角イエスが行こうと願っていたのに、どんな事情であれそれを拒絶したのだから、サマリア人は救われない。ここで言おうとしていることはそういうことか。

でも、ヨハネの福音書4章には、イエスがサマリアにあったヤコブの井戸の傍らでサマリア人の女性を救い、そこから町中に福音が広められていったとある。ルカの福音書でも10章でも、イエスは「よきサマリア人」のたとえを語っていますから、イエスはサマリアの人々を温かい目でご覧になっているのも確かなのです。それなのにどうしてここに、サマリア人がイエスを受け入れなかったという話が出て来るのか。そのことを考える前に続く57節以降のことをまず見ておきましょう。

2 イエスに従おうとした人たち

1) 三人の場合

57節以降にはイエスに従おうとした三人の人たちのことが出てきます。一人目の人が「あなたがどこに行かれても、私はついて行きます」と言ったのに対し、イエスはこう言われます。「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕するところもありません。」動物でさえねぐらのとなる穴や巣があるけれど、「人の子」すなわちイエスには寝るところもない。これは、「ついてこないほうがよい」と言っているのとほとんど同じです。

ところが次の二人目は、それとは反対で、イエスの方から「わたしに従って来なさい」と言われたケースです。ところが、その人が「まず行って、父を葬ることをお許しください」と言うと、イエスは「死人たちに、彼ら自身の死人たちを葬らせなさい」と言われてしまう。

三人目は、「主よ、あなたに従います」と言った後で、「ただ、まず自分たちの家の者たちに、別れを告げることをお許しください」と言うと、「鋤に手をかけてからうしろを見る者はだれも、

神の国にふさわしくありません」とお答えになる。

どうでしょうか。イエスに従おうとするなら、寝るところもないから覚悟しなさい。家族の葬式を出すことさえできないどころか、お別れの挨拶すら許さない。最初にも触れたように、イエスに従うとはこんなに厳しいことなのかと驚くのではないですか。

2) 自分を捨て、自分の十字架を負って (9章23節)

イエスに従うというテーマは、実はここが初めてではありません。すでに9章23節で同じテーマが扱われていました。イエスが弟子たちに、ご自分が多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日目によみがえらなければならないと語ってから、こう続けるのです。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従ってきなさい。」

今日の箇所の中の三つのケースとも照らし合わせても、イエスに従いたいと思う者は非常に高いハードルを越えなければならない、ということが一貫しているようです。

これは大変困ったことです。クリスチャンには寝るところはありません。クリスチャンは親の葬儀に出席することは許しません。クリスチャンは家族に別れの挨拶などする暇はなく、何を置いてもすぐに従わなければならない。皆さんできるでしょうか。いや、その前に私は牧師として率先して模範とならなければならないのですが、正直に申してとてもできません。言い訳ではありませんが、イエスの時代から今日まで絶対いかなかったとは言いませんが、ほとんどいかなかったと思います。これはもう、「あなたがたはわたしに従うことなどできない」、そう言っているとしか思えない。

3) 拒絶した人たち、拒絶された人たち

そこで、先ほどわきに置いていたサマリア人のことに戻ります。57節以降とどんな関係があるのか。非常にわかりやすくするために、こんなふうに分けたらどうでしょうか。56節までの前半は、サマリア人がイエスに従うことを拒絶した箇所である。そして57節から後半の部分は、それとは反対に、イエスに従いたいと願っている人たちがイエスが拒絶したことが書かれている。拒絶した、拒絶された、立場の正反対ですが、いずれにしてもイエスに従う者はいない。結果としては同じです。

3 神の国にふさわしい者

1) イエスの受難と、イエスに従うこと

なぜイエスに従う者がいないと、こうまで徹底して語るのでしょうか。そのことを答えとなる鍵は51節です。「さて、天に上げられる日が近づいて来たころのことであった。イエスは御顔をエルサレムに向け、毅然として進んで行かれた。」

「イエスが天に上げられる日」、すなわち十字架のみわざを成し遂げる日です。そのことが、サマリア人がイエスを受け入れなかったことと、イエスに拒絶された三人のことと結びついているのではないか。では、イエスに従うというテーマが出てきた9章23節ではどうだったか。イエスが捨てられ、殺されて、三日目によみがえらなければならないと語った直後に「わたしについて来たいと思うなら」と続く。同じパターンです。いずれもイエスの十字架とイエスに従うことが一緒に出て来る。これは何を意味するか。

2) 死、よみがえり、永遠のいのち

57節の最初の人のケースを見ましょう。「あなたがどこに行かれても、私はついていきます。」これは誓いですから、もしここでイエスが、「それならわたしについて来なさい」と言ったらどうなりますか。誓いは破ってはいけません。この人は、十字架にもついていかなければならなくなりません。でも、イエスには枕するところはこの世にはないと言われます。ではどこにあったのか。墓の穴です。墓の穴にしかこの方の枕はない。そこに行けるのはだれか。イエスだけです。だから「あなたはついていくことができない」と言われるのです。

59節の二人目のケース。イエスは、「死人たちに、彼ら自身の死人たちを葬らせなさい」と言われました。いっけん、葬式に出てはいけないと語っているように聞こえました。しかし、これがイエスのよみがえりのことと関係があると見たらどうでしょう。もはやイエスには死というものがないことになる。葬儀に出てはいけいけいではなく、あなたはやがて死人を葬るということがない時代、そういう時代を迎えるのだ。そのことを言い広めなさい。そのように理解することができそうです。

61節の三人目。お別れの挨拶をしてはならない、ということではありません。神の国においては、お別れの挨拶が必要ない。なぜなら死からよみがえって永遠のいのちをいただくのですから、神の国にはもはや別れがないのです。

3) 神の国にふさわしい者

ここを最初に読んで、「今日から私はこんなふう
にイエスに従おう」と決心した方はおそらくいな
いでしょう。真面目に読めば読むほど、私にはで
きない、だから私は神の国にふさわしくない、神
の国には入れない、と心が暗くなった方が多いの
ではないか。でもよく見たら、まったく違った。
イエスは私たちをがっかりさせるためにではな
く、私たちに励ますために語っておられたので

す。なぜここにイエスを拒絶した人たちと、イエス
に拒絶された人たちのことが出て来るか。二つの
ことを挙げるすることができます。

一つ目。拒絶する、拒絶される、立場は違いま
すが、結局イエスに従う者はひとりもいない。そ
の結果、神の子お一人だけにしか十字架のみわざ
を完成させることができない。そのことを言おう
としている。

二つ目。仮に自分のいのちを捨てて人々を救い
たいと願う者がいたとしましょう。実際に、そう
やっていのちを捨てた人はいたと聞きます。しか
し、そうであっても、それは十字架の代わりには
ならない。私たちを救うためにいのちを献げられ
るのはイエスしかいない。別の言い方をすれば、
神は私たちを救うためにイエス以外の誰かのいの
ちを要求することは絶対がない。その絶対がない
ことを言い表すために、きょうのような厳しい言
い方がされた。

イエスに従うことはなんと高いハードルだろう
と悲しみましたが、実はここに神の大きな愛が込
められていたのです。私たちのうちに最初から神の
国にふさわしい者はひとりもいません。ただイエ
スだけが神の国にふさわしい者となったださ
り、罪深い私たちが神の国に迎えられる道を備えて
くださいました。その恵みに感謝します。